

平凡な人にはなりたくないのだ。

一時間目の古文の時、案の定、僕は一番に当たった。

しかし、最初の文を読むだけで勘弁してくれると思っていたが、まあ、なんと、

「当たるのわかってるね。」

準備してただろ。

一節、全部読んで、全部訳しなさい。」だってさ。

まあ、なんと、当てのはずれたこったあ。でも、まあ、上出来だった。

枕草子 三百一段からである。

「この冊子 目に見え心に思ふことを」

(綴じた本のこと)

この冊子、目に見え、心に思ふことを、人やは見むとすると思ひて、つれづれなる里居のほどに書き集めたるを、

(まさか見ないと思って)

あいなう、

(書き集めたが)

人のために便なきいひ過ぎしも

(不都合な言い過ぎも)

しつべきところどころもあれば

(してしまった所があるが)

よう隠し置きたりと

(よく隠して置いてあると)

思ひしを、

(思っていたが)

心よりほかにこそ

(心ならずも)

もり出でにけれ。

(もれてしまった。)

人の悪口も意見のうち